

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

仏教の伝来

山口 浄和

仏教伝来には公私二つがあつて、仏教公伝と呼ばれているのは、百済国聖明王が朝廷に仏像経巻を送り届け、その功德を伝え、信仰を勧奨した事実などから、これ以後を我国に於て仏教が公けの宗教として根をおろす契機となしたのである。

この聖明王献仏の年代は、五三八年もしくは五五二年といわれている。五三八年は「元興寺縁起」、「法王帝説」などの古史料に見られるところであり、五五二年は「日

本書紀」の欽明十三年壬申の条に見えるところである。

この両者の十四年の距りについて、明治以後多くの学者により研究考証がなされて来たが、「日本書紀」の紀年に重大な錯簡のある事が推測されるようになって来た為に、今日では一般に、五三八年、即ち欽明戊午年（日本書紀では宣化天皇の三年に当る）が有力になつた。しかしそのいつれの説にしても、仏教が六世紀の前半に我國に公式に伝来した事は間違ひのないところである。

我國と外国との交りが記の上にあらわれてくるのは、「日本書紀」によると崇神天皇十一年（前八七年）の条に見られる。

又六十五年（前三三年）には、「任那国蘇那曷叱知を遣して朝貢せしむ、任那は筑紫国を去る二千余里、北、海を阻てて以て鷄林の西南に在り」

とせられるものである。そして二〇〇年に規模の大きな三韓との交渉が始められて、多数の技術部民の来朝、移住があつたことが記録されている。

これらいずれも伝説な面もあり、殊に「日本書紀」の年代には大幅な年代延長の作為があり、必ずしもこの年

代を以て正確な史実として比較する事は出来ないが、しかしながら後漢の班固（？―一九二）の撰んだ「前漢書」、晋の陳寿（？―二九七）のえらんだ「三国志」の魏書の倭人伝に至るまで倭国とシナと交渉を伝える記録は少なくなさそうである。

そして二〇〇年以後日韓交渉の事実、四〇〇年以後の朝鮮仏教の流盛と雄略朝（四五七―七七九）に於いての帰化人の保護と優遇、これに応じた。大規模なる氏族の結成移住の事実などから見ると、百濟の聖明王が仏像經卷を朝廷に献上したというところから、仏教公伝の一世紀乃至一世紀半の間が仏教の私伝時代であつた。このように受容体勢の流れを本格的にしていた時期ともいえるのである。

インド仏教に於ける業思想の歴史的展開

山 崎 正 人

仏教に於ては仏陀の説かれた、諸行無常、諸法無我、涅